

# 墨書土器の吉祥語と史的背景

## —「天福来」の検討を通じて—

門田 誠一

### 序 言

考古学遺物のなかで文字や銘文の記された出土文字資料の蓄積は、これらに対する研究分野を確立させた。そのなかでも墨書土器は地域ごとの集成とそれによる全国的な情報の体系化が進行している。いっぽうで、墨書土器は現状で全国の出土数が八万点ともいわれる数量から、これらに対する分析方法が課題となっている。

墨書土器の文字うち、一定の長さの文章については考察が行われているのに対し、比率としては大部分を占める一文字の墨書については、基礎的な知見が示されてはいるものの、これらの意味するところを思想的または社会的背景から論じた研究は寡聞にして知らない。

筆者はこのような一文字の墨書に関して、これらを含む成語や複合語の検討をすることが問題の解決に資すると考える。その一環として本論では吉祥語とされる「福」字を含む語の墨書を検討することによって、それが書写された時代や階層の思想および社会の史的環境を明らかにすることを試図する。

そのために本論で対象とする資料は高野遺跡（滋賀県栗東市）で出土した「天福来」の墨書のある須恵器坏である。具体的な検討に先立って、まず、この遺物に関する事実関係を確認しておきたい。

#### 一 「天福来」墨書土器と出土遺跡・遺構

高野遺跡（滋賀県栗東市）は野洲川左岸の標高一〇五～一一〇メートル前後の自然堤防状微高地に立地し、縄文時代から古墳時代および平安時代の遺構と遺物を中心として、近世・近代にいたる遺構と遺物が発見されており、近接する手原遺跡とともに長期間におよび、とくに古墳時代には高野・手原（栗東市）・岩畑（栗東市）の三遺跡に集落が形成されたことがわかつている。<sup>①</sup>



図1 高野遺跡出土「天福来」墨書須恵器

これまでの発掘調査のなかで一九八五年（昭和六〇年度）には古墳時代から平安時代にいたる竪穴住居址や土坑・流路などの遺構が検出され、土師器や須恵器などの土器類が出土した。遺物のなかには包含層から出土した須恵器坏身の高台の付いた低部の破片があり、外底面に墨書が記されており、「天福来」と釈読されている（図1）。墨書は鮮明で、三字めの第二画と第三画は繋がっており、一筆で記された異体字とみられるが、本論では「来」と表記して論を進めていく。

この須恵器は包含層出土のため遺構による年代の推定はできないが、型式的には奈良時代に属するものであることは明らかである。報告書では周辺から出土した建物址などの年代が古墳時代から近世末期までのⅦ期に分けられており、そのなかではⅦ期とされた八世紀後半頃がもっともちかいと考えら

れる。<sup>(2)</sup> 奈良時代の須恵器自体、編年の細分がなされていないが、杯の器形の全体的な変化としては蓋の偏平化と口縁部の断面の屈曲などが認められ、このような器形の変化を勘案すると、高台の脚の形状や開き方から、この須恵器は奈良時代でも前半期に属する（山田邦和編年のⅥ期前期、大阪府南部窯址群では陶器山二一号出土資料を典型とする<sup>(3)</sup>）と考えられる。

高野遺跡の属性は数次におよぶ発掘調査によって、縄文時代から古墳時代を中心とした集落遺跡とされ、この墨書土器の示す時期にも集落址であったとみられ、时期的にも地理的にも近接した遺跡としては辻遺跡（栗東市）や手原遺跡などが知られる。とくに手原遺跡は周辺の栗太郡糸里地割とは異なる正南北方向地割が遺存し、東海道等の幹道に沿う交通の要衝に位置し、寺院址と関連するとみられる瓦や官衙遺跡であることを示す石帯などが出土しており、奈良時代後半には官衙的機能をもっていたと考えられている。また、近隣にある岡遺跡（栗東市）は奈良時代の郡衙と想定されている。このような周辺の遺跡の様相から、高野遺跡から出土した墨書土器に二次的な移動があるとしても、官衙遺跡やその周辺に所在する関連遺跡との関係が想定される。

高野遺跡から出土した「天福来」墨書土器は包含層からの出土ではあるが、残存状態から器種や型式が明らかであり、時期の推定も可能であるにもかかわらず、これまで取り上げられることはなかった。しかしながら、「天福来」の墨書は古代における吉祥語の用法やさらには漢字とその背景にある教養の実態を知るのに重要な資料である。次項以下でこれについて、関連する墨書土器の類例も参照しつつ考察を行いたい。

## 二 「天」「福」墨書の類例と関連史料

「天福来」の語の構成は「天福」と「来」の二つの語からなると考えられる。これを傍証する墨書土器として

他地域の遺跡から出土した「来」字を含む墨書土器をあげてみると、その典型としては「富来」墨書土器がある。

「富来」墨書は後述するように諏訪前A遺跡第二地区(神奈川県平塚市)、浄水寺址遺跡(石川県小松市)などで出土しており、地域をこえて用いられた語句であることがわかる。

その他に同様の語としては「福来」の墨書が記された土器が知られ、御山千軒遺跡(包含層出土土師器坏・福島市・九世紀後半<sup>④</sup>)での出土例があり、これらについては「天福来」墨書土器との関係性を中心に後述する。

「天福」の語を構成する吉祥語のうち、「天」字の墨書土器は出土例が多く、平安時代の例としては、北は岩手県(向中野館遺跡・盛岡市)<sup>⑤</sup>(猫谷地遺跡・北上市など)で、南は熊本県(神水遺跡・熊本市)<sup>⑦</sup>、で出土しており、時期が下るが沖縄県(浦添グスク・浦添市)<sup>⑧</sup>でも発見されている。またこれらの他に通有の漢字だけでなく則天文字で記された例も知られているが、今回は検討の対象としない。

「福」字墨書土器も北は秋田県(小谷地遺跡・男鹿市)<sup>⑨</sup>・(秋田城・秋田市)<sup>⑩</sup>、山形県(服部遺跡・山形市)<sup>⑪</sup>、南は熊本県(大江北河遺跡・熊本市)<sup>⑫</sup>・(高橋町遺跡・熊本市)<sup>⑬</sup>などで出土している。

上記の「天」「福」字墨書土器の出土遺跡のうち、浦添グスクの他は鎌倉時代以降とみられるが、その他の例から、古代において吉祥語は東北から九州までに及んでいたことが知られる。

「天福」の語が記された墨書土器は管見の限りでは高野遺跡の一例しかないが、出土文字資料の集中的な出土が知られる平城京以外で、年号に含まれる場合や仏典関係の文字などを除いた出土例としては「天」字を含む語や文章が記された墨書土器は類例が少ない。その例としては、「及者天大□」(森坂北遺跡・埼玉県入間市・九世紀)<sup>⑭</sup>、「開天」(獅子之前遺跡一二号住居址土師器坏・山梨県甲州市・九世紀末)<sup>⑮</sup>、「天作」(上堂ヶ塚遺跡・山梨県富士河口湖町・詳細な時期不明)<sup>⑯</sup>、「具天」(下中村遺跡包含層土師器坏・秋田県仙北郡美郷町・一一世紀末)

一二世紀初頭<sup>17</sup>、「天上」(雀居遺跡包含層土師器・福岡市・一〇世紀)、<sup>18</sup>「天□女」(武蔵国府関連遺跡・東京都府中市・九世紀)<sup>19</sup>などがあり、例数に比して広範な地域で出土していることが知られる。

いっぽう、史料や古記録にも「天福」の語の実例は少ない。そのなかで、『小右記』長和元年五月四日条には前月の二十七日の皇后城子の宮子の除目の間に蜈蚣が出たことに対し、筆者である藤原実資は何かの啓示かと思い、陰陽師である賀茂光榮に占わせた内容として、「財是主財、天一是主天子、又为天福、これを以てこれを云はば、主天子の福慶を蒙るの象か」とある。<sup>20</sup>この占いの結果を示す文章のなかに「天福」の語がみえており、ここでは陰陽道の語句としての「天福」は吉祥語として、「福慶」の類語として用いられている。

この他に参考資料としては目代という職にあった人名としての「天福」は前六供遺跡三号井戸(群馬県新田郡新田町)出土の木簡に「□貞観九年」(八六七)などの年次とともに記されている。<sup>21</sup>

時期的には下るが、「天福」の語の使用法が具体的に知られる文書として、久安元年(一一四五)の「由原宮宮師僧院清解」すなわち豊後一の宮である杵原八幡宮(現在の太分市所在)の宮師であった僧・院清という者が、官長の桑と名畠の裁免を乞うたために差し出した斛状の中に「ここにつらつら事情を案ずるに、官長殿の御命に非ずんば、天福皆来、地福円満、望むところ有る可けんや」とみえ、ここでは「地福」と対をなす吉祥句として用いられている。<sup>22</sup>

古代から中世にかけての史料や古記録にみえる「天福」について瞥見してきたが、これらはいずれも「天福」墨書土器よりは後出の例であり、逆にこの墨書土器がより原初的な用例であることを示している。そのうえ、「天福来」は「天福」が「来」という主語と動詞から構成され、たんなる吉祥句や吉祥字ではなく、短いながらも文を構成していることが注意される。

### 三 漢籍・仏典にみえる「天福」

あらためて吉祥句ないし吉祥語としての「天福」の語義を確認してみると、一般的な辞書の説明では「天から賜るさいわい。天与の幸福。天福日の略」などとみえ、さらに、「天福日」とは「陰陽道で、建築・転宅に吉であるという日」と説明されている。

このような「天福」の語ではあるが、史書や古記録に現れることは稀であり、史上では鎌倉時代の年号としても知られ、四条天皇の時に用いられた(一二三三—三四)。その時には典故として、『尚書』の「政善天福之」を基にしたとみえるが、これは『尚書』すなわち『書経』湯誥篇にみえる「天道福<sup>(23)</sup>善禍<sup>(24)</sup>淫」に対する孔伝すなわち孔安国による注とされる。『書経』の孔伝は偽孔伝と呼ばれ、孔安国に仮託して東晋代に編纂されたものとされるが、天福改元に際しては、これに基づいて政治の善なるを天福とするとされており、これが典故となつたのである。「天福」墨書土器は時期的にはこの改元記事を三〇〇年以上さかのぼるが、鎌倉時代における宮廷人たちの経書とその注釈書にみえる吉祥語の政治的利用を示している。

この改元記事を参考として、ここで改めて中国古典にみえる「天福」の語をみてみると、まず、『列子』には以下のような用例がある。すなわち、「以て生くべくして生きるは天福なり。以て死すべくして死するも天福なり。以て生くべくして生きざるは天の罰なり。以て死すべくして死せざるも天の罰なり」であって、この部分は列子の中では原典としてよいとされ、大意としては人の生死を天の福として運命づけている<sup>(25)</sup>。

また、『墨子』法儀には「昔の聖王禹湯文武は天下の百姓を兼愛し、率いてもって天を尊び、鬼に事(つか)え、その人を利すること多し。ゆえに天はこれに福(さいわい)し、立てて天子たらしめ、天下諸侯は皆これに賓事

す」とある。<sup>(27)</sup>これは墨子の説く倫理のなかでも代表的な兼愛すなわち自他親疎の差別のない平等の民への愛について述べられており、<sup>(28)</sup>往古の聖王である禹・湯・文・武はこれを行うことによって天が福(さいわい)する、とみる。同じく天のもたらす福については、「人を愛し人を利する者は天必ず之を福し、人を悪(にく)み人を賊(そこな)う者は天必ずこれに禍す」とあり、人と天のあり方と禍福の関係を説いている。<sup>(29)</sup>これらの文章では「天福」という熟語として解釈されるのではないが、出典論的には重要であろう。

ひるがえって陰陽道の形成過程で影響を与えたとされる道教の經典では、五斗米道を創始した張道陵の著作かといわれる『老子想爾注』に「仙寿天福を求めんと欲すれば、誠を守り、守信を守り、過ちを忒せず、罪成りて是天曹に結すれば、右契は致ることなくして尽き、余に復せず」と説かれる。<sup>(30)</sup>すなわち、信を守って、過ちを繰り返さず、罪を天曹すなわち天神に告げると、右契(契約の際に証文札を二分したうちの一方)は届くことがなく繰り返さないとあり、天神の査察に対する内面的倫理を規定した「道誠」の厳格な遵守が要求され、これによって天曹より仙寿と天福が授けられると説かれている。<sup>(31)</sup>ここにみえる「天福」は「仙寿」すなわち常しなえの寿命とともに天曹すなわち天の神々によって授けられる福幸をいうのであろう。

「天福」の語は史書にも散見されるが、皇帝の詔勅などにみえるものとしては前漢の宣帝が神爵二年(紀元前六〇)に前年の吉祥について述べ、赦令を出した時に「京師に鳳凰が集まり、甘露が降り、これに従う群鳥は万をもつて数えるほどであった。朕の不徳にもかかわらずしばしば天福を得たが、政事をつつしみ怠らないでいるそれ天下に赦札を下せ」とある。<sup>(32)</sup>この天福は鳳凰や甘露とともに、すでにふれた「天から賜るさいわい。天与の幸福」の意で用いられている。

「天福」の語は仏典にも頻出するが、とくに阿含經類に散見される。たとえば、『長阿含經』には「我今すでに

人間の福報を受く。まさにまた進みて天福の業を修すべし」とあり、また「我今すでに人中の福樂を受け、まさにさらに方便して遷して、天福を受くべし」<sup>(34)</sup>、「もし審らかに天福あらば汝まさに還り来たつて我に語つて知らしむべし。然りて後にまさに信ずべき」<sup>(35)</sup>などの用例がある。

また、『中阿含經』には沙門瞿曇すなわち出家する前の釈迦の言の一つとして「必ず彼の天福に勝り、梵行勝る」とあり、ここでは「梵行」すなわち仏教の修行と並列して「天福」が用いられている<sup>(36)</sup>。

『増一阿含經』には釈迦の言として、長く地獄において熱した鉄丸を飲んだり、あるいは草木を食したり、未だ成道しない騾、驢、駱駝、象、馬、猪、羊または餓鬼などが世界を構成する四つの正しい働きに長じ、「或いは天福を受けて、自然の甘露を食す」<sup>(37)</sup>とあり、あるいは「この施は最勝なり。諸仏の加歎するところ、現身にその果を受け、逝けばすなわち天福を受けん」<sup>(38)</sup>などとみえる。

この他にも多数の用例があり、とりたてて仏教語として取り上げられることはないが、仏典にみえる「天福」の語はいうまでもなく漢訳に際して用いられた語であつて、上述の用例にみられるように抽象的な吉祥としての福を示す語として現れており、經書等にみえる意味を敷衍して用いられている。

このように「天福」の用例をみると、この語は經書や中国古典などの漢訳仏典以前の文献にすでに存在した吉祥を表す語であり、これを受けて日本列島では古代以降に用いられたことがわかるとともに、日本の古代・中世の文献史料と比較しても「天福来」墨書土器はきわめて早い時期の資料であり、日本における吉祥語使用の初現的な様相を示すことがわかる。



## 四 「天福来」墨書土器と吉祥語の流布

墨書土器に記された吉祥語としての「天福来」を論じるために関連した語句の記された類例をあげておきたい。まず、文章として主格となる吉祥語と動詞が組み合わさるという点で類似した墨書のある土器としては、すでにふれたように「富来」墨書土器が諏訪前A遺跡第2地区(竪穴住居址SI〇五土師器坏・神奈川県平塚市・九世紀後半)、浄水寺址遺跡(石川県小松市)で出土している。諏訪前A遺跡は砂州・砂丘に立地しており、竪穴住居址・掘立柱建物などが検出されている。遺構の所属時期としては、竪穴住居址が七世紀後半から一〇世紀前半までの時期のもので、中心は九世紀後半にあり、掘立柱建物址は八世紀と一〇世紀が中心となり、比較的継続的に営まれたとみられている。出土遺物としては銅製帶金具・円面硯・太刀の鐔などがあることから一般集落ではなく官衙関連遺跡の一角であり、官人層の住居域を含むと考えられている<sup>39)</sup>。

浄水寺跡は平野に近い山間に立地する山林寺院であり、調査によって平安時代～室町時代にかけて営まれていたことが判明した。検出遺構としては溝や掘立柱建物があり、土師器を主体とした出土遺物とあわせて、浄水寺は時期的には九世紀後半に成立したと考えられる。その主たる根拠は溝などから大量に出土した墨書土器のなかに「浄水寺」と記された資料が多数認められる点にある。出土遺物には銅三鈎鏡、銅鉢、金銅荘嚴具、金銅軸端、僧形木像、僧形板絵、板塔婆などの仏教関係遺物やその他には仏像・法具(三鈎杵か)と塔婆などの仏教的図像を墨書で描いた戲画土器などが出土しており、これらは寺院址であることの証左となっている。その他の出土遺物では越州窯青磁・長沙窯水注や刀装具である兜金の他に鳳凰形装飾などの金属製品などが出土しており、これらの出土によって、報告書では平安時代の浄水寺が有力な地方の在庁官人によって庇護のもとに成立した山間寺院

と位置づけられている。「富来」を含む墨書土器は平坦面(Ⅱ―三・四テラス)やそこに掘られた大溝から出土しており、これを含む墨書土器の時期は九世紀後半から一〇世紀後半頃とされている<sup>(40)</sup>。

また、「福来」墨書土器は、御山千軒遺跡(福島市・包含層出土土師器坏・九世紀後半)<sup>(41)</sup>や平城京宮跡(第28次調査・奈良市・須恵器坏<sup>(42)</sup>)などで出土している。また、刻書としては「□福来見」の文字のある須恵器坏が箕打みやの窯跡(石川県高松町・灰原出土・九世紀後半)から出土している<sup>(43)</sup>。

いうまでもなく、これらの「富来」「福来」「□福来見」の墨書は吉祥語である「富」や「福」が「来」という意味で用いられており、これらの資料は九世紀から一〇世紀頃に属し、かつ広い地域にわたって散在することから、平安時代には生活文化のなかで広範囲に流布していたことがわかる。加えて、遺跡の種類も集落遺跡だけでなく、窯址でも出土していることから、生活および生産の次元で吉祥語が浸透していたと考えられる。のみならず、その背景となる吉祥語の文化やその典故となる知識や教養の展開があることを示している。

吉祥句は中国では吉祥語と呼ばれるが、その事例は文献・金石文などの出土文字資料ともに先秦時代にまでさかのぼる。ここで取り上げている「天福」の語とも関連する吉祥語に関する記載として、たとえば福に関しては次のようにみえている。すなわち、『書経』洪范には「五福とは第一に寿である。第二は富である。第三は康寧である。第四は好徳をおさめることである。五は考となり命を終える」とあり、五つの福について、順に長命、富貴、安らかさ、修徳、老いて天寿を終えることであると説く<sup>(44)</sup>。

そしてこのような「福」の反語は「禍」であり、「禍福」に対する言及として著聞するのは『老子』の一節である。すなわち、「禍や福の倚(よ)る所、福や禍の伏すところなり。孰(だれ)かその極みを知らん」として、禍福が表裏にあることを説いている<sup>(45)</sup>。

このような「福」に象徴される吉祥語は金石文などにはそのうちの一字がとられる場合が多く、その出土例は先秦時代にさかのぼる。近年の一括出土資料としては、戦国時代の秦の王墓である秦公大墓（とくに一号大墓と王姬墓）で出土した石磬や青銅器があり、多種の吉祥語が記されていることが明らかになった。すなわち、「吉」「康」（石磬）「大福」（編鐘）などの吉祥語とこれらを組み合わせた「以匱（筆者注・燕と同義、以下同じ）皇公、以受大福……」（秦公及王姬編鐘）などの文章であり、統一後の秦代の礼楽や祭祀の基盤となつていふと考えられている<sup>46</sup>。

ひるがえって吉祥そのものについて瞥見してみると、吉そのものは甲骨文や『周易』には頻出し、それらの属性からとくに「貞吉」すなわち吉を貞（と）うなどの文としてみえる。また、いうまでもなく「吉凶」として、凶に対する吉として二元的に用いられ、その例は「天下の吉凶を定める」<sup>47</sup>とか「国家の吉凶を覲るを以て、以て詔して政を救う」<sup>48</sup>などのように、当然ながら天下国家に関する事象としてもみえている。

いっぽう、「吉」に対して吉祥の「祥」は、経書においては『礼記』礼運に「祝（筆者注以下同じ・祭主が祖霊に告げる語）が孝を告げ、嘏（嘏辞すなわち祖霊が祭主に告げる語）は慈を以て告ぐ。これを大祥という。これ礼の大成なり」<sup>49</sup>とあるように祭儀の結果として祖霊と人との和氣の通じ、礼が完結した状態をいう。

このように「天福」の語が含まれる吉祥語は経書や諸子に頻出し、たんなる吉兆というのみならず、礼やその祭儀の関係のなかで意味を有することがわかる。これらの点からも吉祥語とその背景となる思想は漢字文化の基盤を形成している要素であることがわかる。

これらが記された墨書土器のなかで、とくに地方の集落遺跡等では「富」「吉」「福」「万」などの一字のみが記された墨書土器が数多く出土しているが、これらに関しては祭祀や儀礼行為等の際に土器に記号としての意識で記された文字であるとする説が示されている。そして、このような集落遺跡出土の墨書土器は日常用の食器に

記されることが多いことから、吉祥語を含めて同族集団の護符的性格を有するのであって、この種の墨書土器の分布が必ずしも文字普及の指標とはなりえないと結論されている<sup>50)</sup>。

しかしながら、「天福」の語は中国の経書や史書にみえる語句であって、それをもとに仏典を漢訳する際にも用いられているように典型的な吉祥語であった。この語が記されている「天福来」墨書土器は「天福」が「来」という文章を構成しており、この土器が地方の遺跡で出土したことは、地方や在地社会における中国古典に基づく知識と教養の浸透を示している。

福と吉祥に関連する文献記載として、平安時代における福德神などの信仰があげられる。『百練抄』応徳二年（一一〇八五）七月には、この月の初めから都ではそここで辻ごと「宝倉」を建てて、その鳥居に額を打ち、その神を福德神あるいは長福神と名づけ、あるいは白朱社などとし、上下を問わず洛中の皆が群集し、盃を重ねること数えられないほどであったので、朝廷はこれを破却すべしとして検非違使に命じ、格式に照らして淫祀としたことがみえる<sup>51)</sup>。

このような福に関連した習俗の禁止は『類聚三代格』には大同二年（八〇七）の応禁断両京巫覡事に関する太政官符として、次のような内容がみえている。すなわち、巫覡の徒は好んで禍福を託し、庶民の愚は仰いで妖言を信じ、淫祠が広がり、厭呪もまた多い。習わしが積み重なって俗となり、淳風を損なっているので、今後これら的一切禁断すべきである。もし、深くこの術に崇められると、懲らしめ改められない。発覚したときは遠国に移配する。所司がこれを知っても糺さず、近隣の人々が隠して相容れれば、いずれも法に准じて罪を科す<sup>52)</sup>。

これは福を求める民衆の動きとされており、また、漢札と呼ばれた祭儀との関係が示唆されている<sup>53)</sup>。すなわち、『百練抄』の仁平三年（一一五三）九月条には、近日、各所に立つ社壇や家々で行う漢札を禁止することを宣下す

とみえ、前記の福德神その他は、この漢礼を指すとみられている。ただし、ここにいる漢礼には同様に流行をみた牛馬を屠る祭祀なども含まれると考えられ、これらを含めて中国的あるいは異風の習俗とされたのであろう。<sup>(54)</sup>

そして、このような平安時代の福に関する習俗の淵源として、奈良時代の民間における禍福に対する信仰や求福の祭祀の流行があげられる。『続日本紀』には天平二年(七三〇)九月庚申の詔に以下の内容がある。安芸・周防の両国の人の中には、みだりに禍福の因果を説いて、多くの人を集め、死者の靈魂を祀り、祈祷するものがあるという。また、京に近い左側(東方)の丘に多人数を集めて妖しげなことを言い、衆人を惑わす者がある。多い時では一万人、少ない時でも数千人という。これらの者ははなはだしく法に背いている。もしこのままであれば、害をなすこと甚だしく、今後はこのようなことをしてはならない。<sup>(55)</sup>

また、宝龜十一年(七八〇)十二月甲辰条の左右京への勅として以下のような内容が記されている。聞くところによると、この頃無知な百姓は巫覡と一緒に妄りに淫祀を崇め、芻犬(藁で作った犬の形代)を並べ、符書の類などが百方に怪をなし、街路に溢れている。求福に事を託し、かえって厭魅に涉(かかわ)り、これはたんに朝廷の法を畏れないばかりでなく、まことに長く妖しく妄らなものを養うことになる。今後は厳しく禁断すべし。もし違反する者があれば五位以上の官人は名を録して奏聞し、六位以下の官人は所司が科を決せよ。ただし、悪いありて祈祀する者は京内の者でなければ、これを許せ。<sup>(56)</sup>

これらは禍福を案じ、福を求める民衆の習俗を示すとされており、ここに記された祭祀習俗の構成要素のすべてを漢礼として中国に由来するものと断ずることは妥当ではないが、そのような要素を含むことは当然想定される。そして、これはさきにふれた地方や在地における中国古典に基づく知識と教養の広がりとも関連すると考えられる。

傍証として奈良時代以前における経書等の地方での受容を示すものをあげるならば、「永昌元年」(六八九)の中国紀年があり、七〇〇年に立碑された那須国造碑に『孝子伝』を典拠とした語句がみられることや、各地の遺跡における『論語』木簡などの出土を勘案すると、地方における吉祥語が記された墨書土器の出土の背景として、中国古典にみえる吉祥に関する語や思想が地方においても展開し、浸透していたことが想定される。

## 結 語

論を閉じるにあたって、内容を整理して結語としたい。まず、高野遺跡出土の「天福来」墨書土器について、出土遺構が包含層であり、所屬時期が奈良時代であることなどの事実関係を確認した。

次に「天」「福」字墨書の類例を参照し、これらの吉祥語が平安時代には東北から九州までに及んでいたことを示した。また、関連史料として平安時代の古記録にみえる「天福」の語をあげた。

続いて、漢籍と仏典にみえる「天福」の用例を引いて、この語が経書や中国古典などの漢訳仏典以前の文献にすでに存在した吉祥を表すこと示した。そして、これらとの比較によって「天福来」墨書土器が日本における吉祥語使用の初現的な様相を現すことを述べた。

さらに墨書土器に記された関連した語句として、吉祥語である「富」や「福」が「来る」という意味で用いられた「富来」「福来」「□福来見」などを取り上げ、これらが九世紀から一〇世紀頃には集落遺跡や窯址などで出土することを示し、この時期には吉祥語が広い地域にわたって用いられていることから、平安時代には生活文化として広範囲に流布していたことを明らかにした。あわせて、「天福」のような吉祥語は経書や諸子などの中国古典に頻出し、たんなる吉兆というのみならず、礼やその祭儀の関係のなかで意味をもつことを示し、吉祥語と

その背景となる思想は漢字文化の基盤を形成している要素であることにふれ、吉祥語を記した墨書土器の出土が地方や在地社会における中国古典に基づく知識と教養の浸透を示すと理解した。あわせて、奈良・平安時代の史料にみえる福と吉祥に関連する記載によつて禍福を案じ、福を求める民衆の習俗を示し、吉祥語の記された墨書土器の背景として在地における中国古典に基づく知識と教養の広がりを選定した。

以上のように本論では「天福来」の語を媒介として、吉祥語とその背後にある文化史的環境を考察した。冒頭にもふれたように墨書土器の膨大な出土数からみると、本論でとりあげた資料は九牛の一毛にすぎないが、一つの考察の方向を示すことで向後の考究の端緒となれば幸甚である。

- (1) 栗東市教育委員会、栗東市文化体育振興事業団文化財調査課編『高野遺跡発掘調査報告書』（栗東市教育委員会…栗東市文化体育振興事業団文化財調査課、二〇〇八年）
- (2) 滋賀県教育委員会文化財部文化財保護課・滋賀県文化財保護協会編『琵琶湖大橋有料道路建設工事に伴う栗東町高野遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会、一九八七年）
- (3) 山田邦和『須恵器生産の研究』（学生社、一九九八年）他の研究者との編年の対照もこれを参照。
- (4) 福島県教育委員会編『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』（福島県教育委員会、一九八三年）
- (5) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター編『向中野館遺跡第5・6次発掘調査報告書—盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査—』（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、二〇〇七年）
- (6) 岩手県教育委員会編『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XⅦ（猫谷地遺跡）』（岩手県教育委員会、一九八二年）

- (7) 熊本市教育委員会編『熊本市出土墨書・ヘラ書き・刻書土器集成(1)』熊本市教育委員会編『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成二〇年度—』(熊本市教育委員会、二〇〇九年)
- (8) 柴田博子「鹿児島県の墨書土器」鹿児島県教育委員会編『先史・古代の鹿児島 通史編』(鹿児島県教育委員会、二〇〇六年)
- (9) 三嶋隆儀・庄内昭男「男鹿市小谷地遺跡の墨書土器」(秋田県立博物館研究報告) 一二、一九八七年
- (10) 秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所編『秋田城出土文字資料集Ⅲ』秋田城跡発掘調査事務所研究紀要三(秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所、二〇〇〇年)
- (11) 山形県埋蔵文化財センター編『服部遺跡・藤治屋敷遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター、二〇〇四年)
- (12) 熊本市教育委員会編『熊本市出土墨書・ヘラ書き・刻書土器集成(1)』熊本市教育委員会編『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成二〇年度—』(前掲注7)
- (13) 熊本市教育委員会編『熊本市出土墨書・ヘラ書き・刻書土器集成(1)』熊本市教育委員会編『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集—平成二〇年度—』(前掲注7)
- (14) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団編『八木上・八木・八木前・上広瀬北・森坂北・森坂』(埼玉県埋蔵文化財調査事業団、一九九六年)
- (15) 山梨県埋蔵文化財センター編『獅子之前遺跡発掘調査報告』(山梨県教育委員会、一九九一年)
- (16) 末木健「山梨県下の墨書刻書土器」(『甲斐路』四九、一九八三年)
- (17) 美郷町教育委員会編『町内遺跡詳細分布調査報告書』(美郷町教育委員会、二〇〇五年)
- (18) 福岡市教育委員会編『雀居遺跡1』(福岡市教育委員会、一九九三年)
- (19) 府中市教育委員会編『武蔵国府関連遺跡調査報告23・天神町遺跡調査報告3』(府中市教育委員会、一九九九年)
- (20) 『小右記』長和元年五月四日条  
財是主財、天一是主天子、又為天福、以此言之、主蒙天子福慶之象。

(21) 釈文は以下参照。



・「以三月十六日天福十八□(日カ)天福〇四月九日「」天福〇(貞カ)觀九年四月十五日「」  
 ・「別当代「」目代「」天福〇檢取權目代壬生道〇

小宮俊久「前六供遺跡」(『木簡研究』二二、二〇〇〇年)

群馬県新田町教育委員会編『前六供遺跡・後谷遺跡・西田遺跡…県道伊勢崎新田線道路整備に伴う発掘調査報告書』(新田町教育委員会、二〇〇〇年)

(22) 宮師僧院解狀

〔裏打紙端裏書〕院清解狀 久安元年

(中略)

一 請被任前例裁免桑事

右、件桑為奉繼毎年御放生会物□也、大菩薩由原御山依往昔縁、令居住已来、隨院清宝前近仕、經数代次第輩也、爰案情事情、非官長殿御命令者、天福皆来、地福円満、所望可有哉、仍為蒙裁定、注子細言上如件、以解。(後略)  
 大分県史料刊行会編『大分県史料』九(大分県立教育研究所、一九五六年)五三頁の「一〇 由原宮宮師僧院清解」  
 (23)『民経記』天福元年四月十五日条

十五日己丑天晴、今日依代始有改元定、予奉行也。……殿下仰云、早可宣下、改貞永二年可為天福元年之由可令作詔書。…天福

五代晋漢書『尚書』云、政善天福之、  
 年号、有難、然而被用了。…(後略)

(24) 野村茂夫『書経』(明德出版社、一九七四年)

野村茂夫「疑「偽古文尚書」考」(上)(下)(『愛知教育大学研究報告、人文科学』三四、三七、一九八五、一九八七年)などを参照。

(25)『列子』力命第六第五章

可以生而生、天福也。可以死而死、天福也。可以生而不生、天罰也。可以死而不死、天罰也。

(26) 山口義雄「列子力命篇研究」『列子研究』（風間書房、一九七六年）四九三～四九六頁

(27) 『墨子』卷之一・法儀第四

昔之聖王禹湯文武、兼愛天下之百姓、率以尊天事鬼、其利人多、故天福之、使立為天子、天下諸侯皆實事之。

(28) 浅野裕一「墨子」（講談社、一九九八年）

橋元純也「『墨子』兼愛論とその周辺（下）兼愛論の系譜と位相」（『東洋古典學研究』一二、二〇〇一年）

(29) 『墨子』卷之一・法儀第四

故曰愛人利人者、天必福之。惡人賊人者、天必禍之。

(30) 『老子想爾注』

欲求仙寿天福、要在信道、守誠守信、不為貳過。罪成結在天曹、右契无到而窮、不復在余也。

なお、この部分の理解には下記を参照した。

李養正「『老子想爾注』与五斗米道」（『道協会刊』一九八三年第二期）（『中国語文献』）

麥谷邦夫「『老子想爾注』について」（『東方學報』五七、一九八五年）

大淵忍爾「『老子想爾注』の成立」（『続老子想爾注の成立』）「五斗米道の教法について」（『初期の道教』（創文社、一九九一年）

年）（初出は一九六六・一九六七年）

(31) 秋月観暎「道教史」『道教—道教とは何か』第一卷（平河出版社、一九八三年）

(32) 『漢書』卷八・紀第八・宣帝劉詢／神爵二年

二年春二月、詔曰乃者正月乙丑、鳳皇甘露降集京師、羣鳥從以萬數。朕之不、屢獲天福、祇事不怠、其赦天下。

(33) 『長阿含經』卷第四

我今已受人間福報、當復進修天當復進修天福之業。（大正新脩大藏經第一卷二三頁下段）

(34) 『長阿含經』卷第六

我今已受人中福樂、宜更方便受天福樂。（大正新脩大藏經第一卷三九頁中段）

(35) 『長阿含經』卷第七

若審有天福者、汝當還來、語我使知、然後當信。(大正新脩大藏經第一卷四三頁下段)

(36) 『中阿含經』卷第一

此間者沙門瞿曇。必說彼天福勝梵行勝。此天得自在退彼天遣彼天也。(大正新脩大藏經第二六卷七九四頁下段)

(37) 『增一阿含經』卷第三六

本末成道時長處地獄、吞熱鉄丸、或食草木。長此四大、或作驢・驢・駱駝・象・馬・猪・羊、或作餓鬼。長四大形、有受胎之厄、或受天福、食自然甘露。此間者沙門瞿曇、必說彼天福勝梵行勝、此天得自在退彼天遣彼天也。(大正新脩大藏經第二卷七五一頁上段)

(38) 『增一阿含經』卷第三七

此施爲最勝諸仏所加歎、現身受其果、逝則受天福。(大正新脩大藏經第二卷七五五頁下段)

(39) 平塚市遺跡調査会編『諏訪前A遺跡第2地区』(平塚市教育委員会、一九八九年)

(40) 石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会編『浄水寺跡』(石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会、二〇〇八年)

(41) 福島県教育委員会編『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』(福島県教育委員会、一九八三年)

(42) 奈良国立文化財研究所編『平城宮出土墨書土器集成2』(奈良国立文化財研究所、一九八九年)

(43) 樫見敦子・上庄由美子・平田天秋「高松町みやの古窯跡出土の須恵器」(『石川考古学研究会会誌』二四、一九八一年)

(44) 『書經』洪范

(45) 『老子』第五十八章

(46) 陳鴻「出土秦系文獻吉祥語研究」(『福建師範大學學報 哲學社會科學版』二〇一一年第一期)(中國語文獻)

(47) 『周易』第八卷繫辭下傳

五福、一曰壽、二曰富、三曰康寧、四曰攸好德、五曰考終命。

禍兮福兮之所倚、福兮禍兮之所伏、孰知其極。

禍兮福兮之所倚、福兮禍兮之所伏、孰知其極。

禍兮福兮之所倚、福兮禍兮之所伏、孰知其極。

能説諸心、能研諸侯之慮、定天下之吉凶、成天下之亹亹者。

(48)『周礼』春官宗伯第三

以八命者贊三兆、三易、三夢之占、以觀國家之吉凶、以詔救政。

(49)『礼記』礼運第九

祝以孝告、嘏以慈告、是謂大祥。此礼之大成也。

(50)平川南「墨書土器とその字形」『墨書土器の研究』(吉川弘文館、二〇〇〇年)三一五～七頁

(51)『百練抄』第五

応徳二年七月自朔日、東西二京諸條、每辻造立宝倉、鳥居打額、其銘福德神、或長福神、或白朱社云々。洛中上下群衆、盃酌無算。可破却之由被仰檢非違使、淫祀。有格制之故也。

(52)『類聚三代格』禁制事

太政官符

応禁断両京巫覡事

右被右大臣宣称奉 勅。巫覡之徒好託禍福、庶民之愚仰信妖言。淫祀斯繁、厭呪亦多。積習成俗虧損淳風。宜自今已後一切禁断。若深崇此述、猶不懲革事覺之日移配遠国。所司知之不糺。隣保匿而相容並准法科罪。

(53)水野正好「福德―その心の考古学」『文化財学報』一、一九八二年)

(54)『百練抄』第七・仁平三年

九月。近日所々立社壇。家々行漢礼。停止之由宣下。

(55)門田誠一「東アジアにおける殺牛祭祀の系譜 ―新羅と日本古代の事例の位置づけ」(『歴史学部論集(佛教大学)』一、二〇一一年)

(56)『続日本紀』卷十・天平二年九月庚辰条

又安芸・周防国人等妄説禍福。多集人衆。妖祠死魂。云有所祈。又近京左側山原。聚集多人、妖言惑衆。多則万人。少乃数千。如此之徒、深違憲法。若更因循、為害滋甚。自今以後。勿使更然。

(57) 『続日本紀』卷三十六・宝龜十一年十二月甲辰条

勅左右京。如聞。比來無知百姓。搆合巫覡。妄崇淫祀。薊狗之設。符書之類。百方作怪。填溢街路。託事求福。還涉厭魅。非唯不畏朝憲。誠亦長養妖妄。自今以後。宜嚴禁斷。如有違犯者。五位已上錄名奏聞。六位已下所司科決。但有患禱祀者。非在京內者。許之。

(58) 東野治之「第七章 那須国造碑」『日本古代金石文の研究』(岩波書店、二〇〇四年)初出は二〇〇二年

付記

本稿は科学研究費補助金(基盤研究C)課題番号二一五二〇七七「出土文字資料の出典論的方法による古代信仰展開様相の研究」(平成二二～二五年度)による平成二四年度の研究成果の一部である。